

ペット可マンション

ヨコテ

中堅食品メーカーに勤める井川芳彦の福岡支店への転勤は五年にも亘っていたが、今度の異動でやっと東京本社へ呼び戻されることになった。まだ内示の段階だが、福岡での営業に苦労した芳彦は待ちこがれていた本社への異動話に、会社の同僚と祝杯を挙げることにした。地元組は呼んでいない。転勤組ばかりだ。転勤組のうち、親しくしている三人がいつもの居酒屋に集まり、無能なくせに威張り散らしてばかりいる支店長の愚痴を言い合った。

他の二人は転勤してきてまだ一年だったり二年だったりで、本社へ戻れるのはもう少しあとになる。羨ましがる二人を宥めながら、芳彦の心は晴れがましかった。本社の営業部長から直々の指名があったらしい。入社してからの二年間をその部長の下で働いたのだが、典型的な唯我独尊の男で、いい印象は持っていなかった。上司でなかったら関わり合いたくないタイプだ。もちろん他の二人も本社の営業部長は知っており、いつの間にか愚痴の対象は支店長から営業部長に移っていた。芳彦も話を合わせた。しかしそんな部長ではあっても、本社へ呼んでくれたとなると感謝せずにはいられなかった。

宴席も終わりになる頃、美菜子のことが話題になった。美菜子は地元採用の社員で、付き合い二年になる。いずれは東京へ戻るつもりだったので、別れの日が来るのかもしれないと意識しながら付き合い二年間だった。だが現実には、東京へ戻ることが決まると、美菜子のいない生活は考えられなかった。別れないで、東京で一緒に暮らす、それが一番だと思った。美菜子は人見知り激しくて引っ込み思案、大人しすぎるきらいがあり、他の二人はそんな性格の美菜子が大都市で上手くやっていけるのか危ぶんだ。芳彦は笑った。口うるさいよりはましだし、地方から出てきて東京に住み始める人は年に何万人、何十万人といる。それに、多少のことなら自分がついているのだから大丈夫だと思った。

美菜子への思いを新たにした芳彦は、和菓子店を経営している美菜子の両親に挨拶に行った。福岡の東部の寂れた田舎町にある商店街はいわゆるシャッター通り化していて、半分近くの店が閉まっていた。その中で和菓子店は何とか生き延びていた。美菜子の両親とパートのおばさんがひとりの小さな店だった。

最初の訪問では義母はともかく、義父の敬三はまともに話を聞いてくれなかった。芳彦の来意はハッキリしていて、それは美菜子の両親のにも伝わっているはずなのに、芳彦が結婚の話に踏み込もうとすると、義父の敬三は話をはぐらかした。娘の結婚に反対しているとか、婿となる芳彦が気に入らないとか、そういう訳ではなさそうだったが、結局、肝心の話をすることなく芳彦は一回目の訪問を終えた。

二回目の訪問はそれから三ヶ月が経ってからだった。芳彦は東京での五年ぶりの生活を再開させたばかりで、なかなか福岡へ行く時間が作れなかった。仕事が忙しく、サービス出勤は日常茶飯事で、毎晩帰りが遅かった。接待にもよく付き合わされた。部長は芳彦を指名することが多くなり、接待を任されることもあった。本社に戻してくれたことといい、部長に目を掛けられている、と芳彦は思った。たまに皆の前で面罵されることもあるが、それは自分への期待の裏返しだと思った。

美菜子が迎えに来てくれている、福岡空港に着く。久しぶりの再会に心が躍る。美菜子も笑顔を向ける。ほとんど毎日、電話やメールをしているとはいえ、実際に顔を合わせるとやはり安堵感が胸中に広がる。駐車場で美菜子愛用の赤い軽自動車に乗り込む。芳彦も免許を持っているが、ハンドルを握るのはもっぱら美菜子の役目だった。それはデートのドライブでも変わらなかった。福岡の道に詳しくないから、というのがその理由だったが、本当は運転が怖かったからだった。芳彦は完璧なペーパードライバーで、免許を取って以来、一度も運転をしたことがなかった。

福岡空港から美菜子の住む街までは車で一時間以上も掛かる。その間、美菜子の口数は少なかった。一度目の訪問がああいう形で終わってしまい、二度目にも危惧を抱いているのかもしれない。それは少なからず芳彦も感じていた。同じ過ちを繰り返す訳にはいかず、今度こそ美菜子との結婚を認めてもらわなければ、と思えば思うほど芳彦はプレッシャーに押し潰されそうだった。

連絡を取り合っていたので、美菜子の両親の意向は聞いている。両親は二人の結婚に反対はしていなかった。ただ全面的に賛成という訳ではなく、不服な点が一つだけあるとのことだった。それは娘が東京へ行くこと。美菜子は一人娘だった。遠く離れた東京へ一人娘が行くことに両親は納得していなかった。飛行機で簡単に行けるとはいえ、やはり東京は遠い。そして、両親が一番拘ったのが、美菜子が東京へ行った場合、東京に知り合いがひとりもないことだった。東京はおろか、埼玉や千葉など関東近県にもいない。美菜子は大都会の真ん中にたったひとりで放り出されることになる。芳彦がいるが、芳彦は日中会社にて、美菜子は芳彦の帰りをじっと待っているしかない。寂しい思いをさせてしまう——そのことが両親には気掛かりだった。

「すぐに友達は出来ますよ」

それは些細なことだと思った。芳彦も大学進学のために長野から東京に出てきた際、ひとりぼっちで寂しい思いをしたが、それほど長い期間ではなかった。普通に暮らしていれば誰かと知り合うし、そんな中から友達は出来る。親の取り越し苦労、杞憂に終わると思った。

結局、二度目の訪問で美菜子の両親は二人の結婚を承諾してくれた。ただし、条件が出された。

お正月は福岡で迎えること。美菜子に寂しい思いをさせないこと——の二つだった。もっと厳しい条件を突きつけられるかもしれないと身構えていた芳彦は、拍子抜けする思いがした。どちらも難なくクリア出来ると思った。

その晩、遅くまで義父と酒を酌み交わした芳彦は、美菜子の家で酔いつぶれた。商店街一の酒豪である義父に芳彦が伍せるはずもなく、芳彦は知らないうちに布団に寝かされていた。隣の部屋では親子三人がまだ起きていた。不意に目が覚めた芳彦は、「頼りにならないようなら、無理しないでいつでも帰ってきていいから」という義父の言葉で酔いが醒めた。

半年後に結婚式を挙げることが決まった。それまでの短い期間を、美菜子の両親が娘と過ごしたがるのは十分に察せられたので、当然、美菜子もそうするものだと思っていた。ところが美菜子は半ば強引に東京へ出てきた。二度目の訪問から一ヶ月もしないうちで、結婚と同時に見知らぬ土地で暮らすのは大変だから少しでも早く慣れておきたい、と美菜子は言った。東京は美菜子が育った片田舎とはまるで違う大都会だ。芳彦も苦労した覚えがあるので、美菜子の気持ちはよく理解できた。大学で友達が出来るまでの数週間、芳彦はアパートの部屋でテレビばかり観て寂しさを紛らわせた。誰かと話をしたかったが、田舎に電話するのは気恥ずかしく、もっぱら、買もしないのに家具屋や電気店の店員に話し掛けた。そのうち大学で毎日顔を合わせる者が何人か出来て、自然と連むようになり、寂しさからは解放された。美菜子の場合、そういった毎日顔を合わせるような人間は芳彦以外にいない。同じマンションの住人とは顔を合わせることもあるだろうが、親しくなろうとすれば却って警戒され、気味悪がられるだろう。そこで会社の女の子に声を掛けた。だが、変な風に勘ぐられるだけでセクハラで訴えられかねなかった。思いの外、美菜子の友達作りはすんなりとはいかなかった。義父に一人前の男として認めてもらいたくて、芳彦は考えを巡らせた。そしてひとりの女性に思い当たった。大学時代に友人だった小野の奥さんが確か生まれも育ちも博多だった。同郷ということで、彼女なら美菜子の友達になってくれるだろう。

美菜子が東京へ出てきて二週間後、芳彦は小野夫妻をマンションに招待した。東京への転勤後にこのマンションに引っ越してきたので、ここに小野が来たことはなかった。無論、奥さんの由貴子が来るのも初めてだった。

「久しぶりだな」

玄関に入った小野が笑顔を見せる。懐かしさに、芳彦も笑顔を零した。小野の後ろから奥さんの由貴子がぺこりと頭を下げる。

「どうぞ」と、二人をリビングに案内していて、芳彦はその胸中に違和感を持った。由貴子の印象が違っていた。痩せたとか太ったとか、そういった見た目の違いではなく、醸し出す雰囲気異なっていた。

キッチンにいた美菜子がリビングに来て挨拶をする。小野は興味津々に美菜子を見た。

「これ、飲もうと思って買ってきたんです」と言って、ワインを差し出す。

芳彦はレベルに書かれている文字がフランス語なのかイタリア語なのか、あるいはその他の国のものなのか、全く分からなかった。美菜子も同じだったようで、ただ愛想笑いを浮かべている。

テーブルに料理が並べられ、歓談が始まる。美菜子以外の三人は昔からの知り合いで話が弾んだ。その中へ美菜子はなかなか入ってこなかった。芳彦は気を利かせて話題を美菜子のことを話題にした。

「美菜子も福岡出身なんですよ、由貴子さんと同じで」

「そうなんですってね」と、由貴子が目を輝かせる。

「福岡のどの辺り？」

「ずっと大分寄りで、言っても知らないと思います、小さな田舎町ですから」

知ってるかもしれないから、と由貴子が言うので美菜子が教えると、薄く笑って、やっぱり知らない、と由貴子は言った。

「博多からどのくらいなの？」

「電車で一時間半くらいです」

「そんな遠くから会社に通っていたんだ」

「いえ、あのう……通勤は車です。電車は本数が少なくて……」

「車だったの。車だとどのくらい？」

「それでも一時間くらい……」

「ふうん。大変なところに住んでいたのね」

由貴子がまた薄く笑った。

「ええ、まあ」と、美菜子は恥ずかしそうに答えた。

芳彦は、由貴子の目元に嘲りの色が浮かんだ気がした。気後れがしたのだろう、美菜子はあれやこれやと雑事を探してはキッチンに逃げた。そんな美菜子が気にはなったが、招待した小野夫妻を放っておく訳にもいかず、芳彦は美菜子の知らない、三人の昔話を続けた。

今日の目論見は外れた。結局、美菜子は小野にも同郷の由貴子にも馴染めなかったようだ。もっと自分から話し掛けろよ、と言うことは簡単だった。しかし、今の美菜子には酷に思えた。小野夫妻に美菜子を受け入れようという意志がまるで感じられなかった。以前はそんな話はしなかったのに、小野の話は言葉の端々が自慢めいていた。会社での業績や出世、いかに自分が仕事の出来る人間であるかを話した。由真の由貴子もそんなとつとを誇りに思っているようで、嬉しそうに小野の話に頷いていた。由貴子は美菜子に話し掛けることも、キッチンを手伝うこともなかった。

「ごめんよ。悪いことしたかな？」

小野夫妻を帰したあと、芳彦は美菜子に謝った。

「何のこと？」

「小野と奥さんの由貴子さん。昔に比べてずいぶん変わっていた。何だか嫌なやつになっていた」

「お友達でしょ、そんな風に悪く言っちゃ駄目よ」

「美菜子のお友達になってもらおうと思って呼んだんだけど、無理そうだな」

「初めて会ったばかりでよく分からないわ。向こうだってそうなのよ。私のことがよく分からなくて戸惑ってたんだと思う」

「そうだといいいんだが……」

おそらくそうではないだろう。小野も奥さんの由貴子も、美菜子の存在を気にも掛けていなかった。無視しているようでもあり、見下しているようでもあった。

「お返しに、今度は私たちが小野さんの家を訪問しない？ もっとあの二人のことが知りたいわ。きっと仲良くなれると思うの」

小野夫妻との関係が気まずくなるかもしれないと危惧したのだろう。芳彦は美菜子の優しさが嬉しかった。

美菜子の提案どおり、芳彦は訪問の約束を取り付けようとした。しかし、小野はしばらくの間、海外出張で日本にいないらしい。ここでも小野は自分の忙しさを自慢した。

結局、小野抜きで三人で集まることになった。

小野の家は電車で五十分くらいのところにある。私鉄、地下鉄、私鉄と三本の電車を乗り継ぎ、その度に美菜子はまごついた。人の波で芳彦からはぐれそうになる。

思えば美菜子は、福岡にいたときはマイカーで通勤しており、電車に乗ったことがほとんどなかった。東京に来てからも、最寄りの駅前でたいがいの用事は済ませ、地理が覚えなかったこともあるが、遠くまで出掛けることはなかった。東京の電車事情がどんなものか、知識としてはあっただろう。頭では理解していただろうが、それは美菜子の理解を遙かに超えていたようだ。

「大丈夫？」

青い顔をした美菜子に芳彦は、乗り換えの駅のホームで声を掛けた。休日にも拘わらず夕方のラッシュ時は混んでいて、美菜子はあまりの人の多さに気分が悪くなっただらしい。

「ごめんなさい、ちょっと……」

立ち止まってしゃがみ込んだ美菜子に、次々と後続の人がぶつかる。芳彦は慌てて、人の波から護るように美菜子を抱きかかえた。

「大丈夫？」と、もう一度声を掛ける。

「何とか。こうしてじっとしていればよくなると思う」と、美菜子が苦痛に顔をしかめて言う。

「ここよりもベンチで休もう」

芳彦は美菜子の躰を抱えて歩き出した。ホームの奥にあるベンチは、ほんの数メートルしか離れていなかったが、それでも遠く感じられた。流れに逆らって歩く二人を容赦なく人の波が遅う。

ようやくたどり着いて美菜子をベンチに座らせると、美菜子はハンカチを口に当てた。吐き気がしているようだ。芳彦はミネラルウォーターを買いにキヨスクへ走り、急いで戻った。

ひと口、美菜子に飲ませる。美菜子は無理して飲んだ。ゴホッ、ゴホッと咳き込む。芳彦は美菜子の背中をさすった。

「遅くなるんじゃない？」と美菜子は、自分のことよりも訪問の時間が遅くなることを気にした。

「そんなことより本当に大丈夫か？ 行くのをやめてもいいんだよ」

「そんなの駄目よ。いろいろと準備してくれているだろうし……約束を破りたくないわ。こんなことで行かなかったら失礼よ」

弱々しく首を振り、美菜子が異を唱える。

そうかもしれない、と芳彦も思った。事情が事情だけに、たとえ訪問を中止しても由貴子は承知してくれるだろう。しかし、わざわざ今日のために用意してくれたであろう料理が無駄になるかもしれないと思うと気が引けた。

「それじゃ、あと五分だけ休んで、それから行こう」

美菜子は頷き、もうひと口、水を飲んだ。

それから五分が経ち、二人はベンチを離れた。美菜子の顔色はよくなっていた。滑り込んできた電車に乗り込み、空いていた席に美菜子を座らせる。芳彦は美菜子の前の吊革に掴まった。あっという間に電車は満員になり、地下鉄の駅を発車した。

もう一度電車を乗り換え、二人は私鉄沿線の目的の駅に着いた。駅前の酒屋で店員のアドバイスを聞きながら由貴子が喜びそうなワインを選ぶ。先日のワインがいくらだったのかは分からないが、芳彦にとってはかなりの出費だった。

予定時間よりも十分ほど遅れて小野の家に着く。自慢の家だけあって豪華な作りの一軒家だった。同じ歳の小野が建てたとはとても思えないほどで、芳彦は堪らなく羨ましくて、惨めだった。

玄関の呼び鈴を押すと、しばらくして由貴子が出てきた。ジャージを着ていて、芳彦たちを見るなり意外そうな顔をした。その顔は化粧をしていなかった。

「あら、今日だったかしら……」

由貴子は芳彦たちの訪問を忘れていた。それでも悪びれもせずに芳彦たちを迎え入れ、リビングへと案内した。家具類も家の外観と同じよう豪華だった。ヨーロッパの本物のアンティークだろう、百年くらい経っているように見える。洗練されていて気品さえ感じられる。

芳彦がワインを差し出すと、由貴子は無造作に受け取り、グラスを用意した。訪問を忘れていたくらいだから料理は用意されておらず、電話で寿司のデリバリーを頼んだ。由貴子はワインと寿司の組み合わせも平気なようだが、寿司なら正直、芳彦は日本酒かビールの方がよかった。

会話は弾まなかった。もともと小野を通じて由貴子と知り合っていたので、芳彦は由貴子とそれほど親しい訳でもなかった。ぎこちない会話がたどり着いた先はどうしても小野のことになってしまい、それは先日の訪問でもさんざん聞かされた話だった。小野のことだけでは飽き足りないようで、由貴子は自分の自慢話までも始めた。学生だった頃、モデルをやっていたらしい。そういえば最初に小野から紹介されたとき、そんな話を聞いた気がする。

由貴子は本棚の隅から古いファッション雑誌を取り出し、テーブルに広げた。雑誌の中程に、確かに由貴子は写っていた。綺麗に着飾り、ポーズをとった由貴子の写真が何枚も載っていた。美菜子が羨望の眼差しで由貴子を見た。憧れのスターを見るような目だった。

「とっておきの写真があるの」と言い、由貴子は別の雑誌を持ってきた。晴れがましい顔で雑誌を広げ、指を差す。

「誰だか分かる？」

写真には二人の女性が写っていた。由貴子ともう一人……芳彦はよく分からなかったが、美菜子は気がついた。

「これって……」

驚いて美菜子が有名女優の名前を告げるのを、由貴子は黙って面白そうに聞いていた。そういわれて芳彦もその写真を見直した。確かに今若者を中心に絶大な人気を誇っている女優に似ている。しかし数年前のものだからか、目元の印象が違った。

「昔はモデル仲間だったの。あまり知られてないけど……整形してるのよ」

自分しか知らない秘密のように由貴子が言う。

「整形してから彼女はとんとん拍子に出世して今や大女優……」

嫉妬するでもなく、淡々と言って由貴子はワインの入ったグラスを口に運んだ。

「整形していたなんて知らなかった……」と、心底残念そうに美菜子が言う。

「大ファンだったのに……」

「そうなの？ それじゃもっと面白い話を聞かせてあげるわ。彼女……清純そうな顔をしてるけど、男をポイポイ捨ててたわ。暴力を振るうこともあったのよ」

捨てられた何人もの俳優やミュージシャンの名前をあげ、いたぶるように美菜子を見る。

「お金にも汚かったの。ご飯代とかタクシー代とか、彼女が払うのを見たことがないわ」と、とどめを刺すように言う。

美菜子はすっかり悄気てしまった。

「彼が専業主婦でいてくれって言うからモデルは辞めたけど、続けていたら私も彼女くらいにはなっていたわ」と、由貴子は本気で言った。

帰りの電車でも美菜子は元気がなかった。電車は混んでいなかったのに、気分が悪くなったわけではなかった。由貴子の話にショックを受けており、それは家に帰っても続いた。

今日の訪問も失敗だったと芳彦は思った。

向こうが忘れていたくらいだから、行かなくてもよかった訪問だった。体調が悪いのに無理して行って、面白くもない話を聞かされ、何のための訪問だったのか——。今後、こちらから連絡をすることはないだろう、と芳彦は思った。絶縁の言葉が頭の中にあった。

ところが美菜子は違った。また由貴子に会いたいと言う。ファッションに自信のない美菜子は、そういった面での引け目を持っていたようで、由貴子に教えを請いたらしい。言うほど美菜子の服のセンスがよくないと思ったことはないが、女の子としてはやはり流行のファッションは気になるのだろう。それでも、慣れない電車で揺られ、体調を考慮しながら行くほどではないと思うし、それに、由貴子には美菜子をあまり近づけさせたくなかった。美菜子に何か悪い影響を及ぼしそうな気がする。

どうしても、と懇願する美菜子に、芳彦は折れるしかなかった。ただし、平日の昼間、電車が混んでない時間に行って帰ってくることを条件にした。

数日が経ち、美菜子が由貴子を再訪する日になった。会社に出掛ける際、芳彦は念を押した。もし電車で具合が悪くなったら、無理しないですぐに休むこと。長居しないこと。何かあったら携帯に電話すること。

美菜子は優しい笑みで頷いた。が、芳彦は不安だった。後ろ髪引かれる思いで会社に行った。会社でも、美菜子からいつ電話が掛かってくるかと思うと仕事が手につかなかった。そんな様子だったから部長から叱責を受けた。芳彦は必死に平謝りした。部長に見放されたくなかった。

美菜子からの電話はなかった。どうやら何事もなく過ぎたようだ。家へ帰ると美菜子は夕食の準備をしていた。帰ってきた芳彦を笑顔で迎えてくれたが、その笑顔が何処か無理をしているように見えた。

「どうだった？ 由貴子さんは」

「楽しかったわよ。いろいろ教えてもらったの」

そう言う割に、美菜子の表情は硬かった。

「本当はどうだったんだ？ 違うんじゃないのか？」

芳彦が問い掛けると、美菜子は悲しい目をした。

「もうすぐ出来るから、早く着替えてきて……」

話したくないという意志を顕わにして、美菜子はキッチンへ引き返した。そんな美菜子を見るのは初めてだった。危惧したとおりの何かがあったようだ。

沈黙の食事の間、テレビの音だけが流れていた。二人とも画面を見てはいなかった。何か話してくれるかと、芳彦は美菜子を見ていたが、美菜子はそんな芳彦の視線を避けるかのように、ずっと俯いていた。

食事が終わる頃、芳彦はキッチンの隅に置かれた紙袋に気づいた。高級ブランドの紙袋で、買い物に行ったのかもしれないが、そのブランドの店は銀座にあり、美菜子がひとりで地下鉄を乗り継いで行ったとは考えにくかった。由貴子と一緒にだったのだろうか——。そうだとすると、美菜子が自分に内緒で高額な買い物をするとは思えなかった。

「あれは何？」と、紙袋に視線を向けたまま芳彦は訊いた。

「もらったの」

美菜子は俯いたままだった。芳彦の言う“あれ”は見なくとも分かったようだ。

「もらった？ 誰に」

「由貴子さんに決まってるじゃない。着なくなった服があるから持って行けばって言われて……」

」

美菜子が顔を上げた。また悲しい目をしていた。

芳彦は紙袋を覗き込み、中にあった服を掴みだした。原色の多い派手な服で、胸元も大きく開いていて思わず顔をしかめる。

「こんなのを着るのか？」

「似合うって言われたんだけど……」

「似合うわけないだろう。美菜子にはもっと地味な……」

「そんなの分かってるわよ。自分に似合わないことぐらい分かっているわ。だけど……」と、美菜子は涙ぐんで抗議した。

「着てみたかったのか？」

美菜子が自分の殻を破ろうとしているのだろう、と芳彦は思った。それまでの地味な自分を捨て、新しい自分になろうとしている——いくぶん無理をしているが、美菜子なりに東京に馴染もうとしているのだと思った。しかしそうではなかった。

「違うわよ。そんな服、着たいなんて思わないわよ。断れなかったの。似合うわよって言われて……持たされたのよ」

涙声で言い、美菜子は寝室へ駆けていった。

その日で由貴子のところへ行くのはやめるだろう、と芳彦は思った。しかし美菜子は三日後、再び行った。何も聞いてなかった芳彦は、同じような紙袋が増えているのに驚いた。由貴子からもらったものなのは明らかだった。

「どうして黙っていったんだ？」

「だって……反対するでしょ？」

「ああ、反対だ。どうせ着ないんだろ？ 着もしないのにまたもらってきて……何だか施しを受けているみたいじゃないか」

「そうよ。あの人は施しをしているのよ。そんな人なのよ。自分の持ち物を分け与えるのが嬉しくてしょうがないのよ」

「馬鹿にされてるんだぞ。それでもいいのか？」

「だって……東京に出てきてあなた以外にはあの人しか話し相手になってくれる人はいないのよ。馬鹿にされているのは分かっているわ。でも……それでも由貴子さんのところに行きたかったのよ。あなたが会社に行ってる間、私は孤独なの。あんな人でも有り難かったのよ」と、溜まっていたものを全て吐き出すように美菜子は言った。

芳彦は驚き、戸惑った。ここまで美菜子が追い詰められていたとは思っても寄らなかった。

「分かった。何とかしないとな……」

「何とかって？」と、美菜子が救いの目を向ける。

芳彦は、アルバイトに出ることを提案した。もう少し東京の生活に慣れてからと考えていたが、悠長なことは言っていられないようだ。短時間でも働きに出れば知り合いが出来て、今の生活に良い変化が生まれるだろう。美菜子も賛成した。明るい声で、何でもいいからやってみたいと言った。慣れない職場に戸惑うことがあるかもしれないけど、今の状況を変えたいの、と断言した。

翌日から美菜子は、求人雑誌を買ってきたり、パソコンで求人サイトを見たりした。駅前の店で張り紙を見てメモをとることもあった。会社から帰って、美菜子がいきいきと話すのが芳彦は嬉しかった。まだ勤め先が決まったわけではないが、これなら近いうちに、美菜子の喜びに満ちた新しい生活が始まるだろうと思った。

美菜子が、由貴子から電話があったと話した。連絡してこなくなった美菜子を不審に思ったらしい。美菜子は躰の具合が悪いことにして、当分、由貴子のところには行けないと告げた。それは遠回しに絶縁を宣言したも同然で、美菜子の顔が沈鬱になった。不愉快にさせられたとはいえ、世話になった相手にそんな仕打ちをした自分に罪悪感を抱いたようだった。

不況とはいえ、美菜子のバイト先はすぐに見つかると思っていた。まだ若いし、エクセルもワードも人並み以上に使える。しかし、事務の仕事は近場にはなく、あるのはほとんどが接客業だった。事務に拘っていた訳ではないが、全くやったことのない仕事、しかもそれは人見知りの美菜子にとって苦手な分野であり、美菜子も芳彦も二の足を踏んだ。

迷いながらも結局、美菜子は駅前の本屋でアルバイトを始めることになった。時給は安く、立ち仕事に不安を感じたが、もともと本が好きだったし、何といても店主の人柄が決め手になった。七十過ぎの店主は、いかにもといった感じの好々爺だった。

勤務時間は午後から夕方までの四、五時間。入荷した本を棚に並べるのが主な仕事だった。美菜子の他に男女の大学生がひとりずつ働いていた。バイトの中で美菜子は少し年上だったが、二人の学生は気軽に話し掛けてくれた。友達のように接してくれた。美菜子が、嬉しそうにアルバイトの様子を話すのを、キッチンのテーブルで芳彦は心強い思いで聞いた。これなら心配することはなさそうだ、と思った。

十日ほどが経ち、珍しく営業先から直帰ができた芳彦は、バイト先の本屋へ美菜子を迎えに行くことにした。もうすぐ美菜子の仕事が終わる時間だったし、たまには二人で夕食の買い物をして帰るもの悪くない。

自動ドアが開くと、本屋特有の匂いがした。レジに店主のお爺さんがいる。

芳彦は美菜子を捜した。店内はそれほど広くなかったが、中央にも棚があって先が見通せなかった。ぐらりと回って確かめると、そこにいると思った美菜子はおらず、若い女性が忙しそうに棚の整理をしていた。まだ勤務時間のはずで、倉庫にでもいるのだろうかと思い、しばらく待つことにした。適当な本を手にとって眺める。しかし読書に縁のない芳彦は読む気になれず、本を戻して再び店内を歩き始めた。すると、奥に〈関係者以外立ち入り禁止〉と書かれたドアがあった。おそらくあそこが倉庫だろう。さっきの女子学生に美菜子と呼んでもらおうかと思ったがやめた。妻の帰りを待ちきれない亭主のようで、みっともない気がした。

結局、芳彦は週刊誌を立ち読みしながら待つことにした。待ってもあと十分ほどだった。

だが——十分が経ち、終わりの時間になっても美菜子は現れなかった。バイトにも残業があるのかもしれないが、そんな話は聞いていなかった。意を決し、芳彦はバイトの女性に声を掛けた

。「ここで上原美菜子という女性が働いていると思うんですが……まだ帰れないんでしょうか？」

「どちら様でしょうか？」と、バイトの女子学生が怪訝そうな顔をする。

「夫です」

まだ結婚はしていなかったが、それを説明するのは面倒だった。

ああ、と頷き、女子学生が含み笑いをする。

「あのう……一週間ほど前に辞められましたよ」

「辞めた？」

「ええ。二、三日来てそれっきりです」

芳彦は茫然となった。上手くやっていると思っていたのに、もう辞めていたとは——。しかも一週間、そのことを何も言わなかった。隠し事をされていたことに、芳彦は腹が立ってきた。

いつもの帰宅時間になるまでコーヒーショップで時間を潰し、いつもの様子で家に帰り、いつもの「ただいま」を告げる。何も知らない美菜子がいつものように「おかえりなさい」と迎える

。

部屋着に着替え、芳彦は冷蔵庫から缶ビールを取り出して喉に流し込んだ。

「今日もバイトだったの？」と、さりげなく訊く。

「そうよ」

芳彦の問い掛けに、背中を向けて料理をしている美菜子の声が震えたようだった。

「あの本屋さん、繁盛しているようだね」

「寄ったの？」

美菜子の声に狼狽が浮かぶ。

「会社の帰りにね」

「そう」

美菜子は話し掛ける芳彦を見ようとしなない。

「美菜子はいなかったね」と告げ、美菜子の反応を窺う。

「時間帯が違うのよ。私はもう家に帰ってたわ」

「勤務時間内だよ、僕が行ったのは」と、ちょっと怒気を込める。

料理をしている美菜この手が止まった。

「知ってるんだ、もう辞めたって」

「ごめんなさい」

ゆっくりと振り返り、美菜子が謝る。

身を小さくして今にも泣き出しそうだった。

「辞めたことをとやかく言うつもりはないんだ。嫌なことがあって、それで辞めたんだとしても僕は何も言わない。僕が怒っているのは……美菜子が黙っていたことなんだ。黙って……僕を騙っていた。それに腹が立って……。どうして本当のことを言ってくれなかったんだ？」

「ごめんなさい。心配を掛けたくなかったの」

「心配を掛けたくなかったって……僕はそんなに頼りないのかい？ そりゃ由貴子さんのことは失敗だったよ。不愉快な目に遭わせたと思っている。だけど、黙っているなんて……内緒事はやめて欲しいな」

「これからは何でも話すわ」

「うん。僕も何でも話すから。それで……どうして辞めたの？」

美菜子が本屋を辞めた理由は、バイトの男子学生にイントネーションをからかわれたからだった。話の切っ掛けを作る、ただの冗談だったのだろう。そんなことで、と芳彦は思ったが、美菜子にとってみれば死ぬほど恥ずかしかったらしい。

二人は夕食を摂りながら、これからのことを話し合った。美菜子は他のアルバイトを探すと言ったが、芳彦は反対だった。今度は上手くいくかもしれないし、いかないかもしれない。もし上手くいかなかったなら——と思うと怖かった。美菜子は二度と外の世界に出て行こうとしないだろう。日々の生活に慣れて、それから探しても遅くはない。焦りは禁物だ。ゆっくりと時間を掛ければ、美菜子も普通の生活が送れるようになるはずだ、誰もがそうしているように。

美菜子も芳彦の提案を受け入れた。とにかく、焦って順応しようとせず、気を楽しんで過ごす——美菜子もそれがいいと思ってくれた。ただ、芳彦がいない日中の、独りぼっちの問題は何も解決されていない。もう由貴子には頼めないし、会社の女子社員にも頼めないし——

「犬を飼ってもいい？」と突然、美菜子が遠慮がちに言った。

思いつきではなく、前々から考えていたようで、今まで言い出しかねていたらしい。珍しく自分からこうしたいと、積極的に発言する美菜子が芳彦は嬉しかった。嬉しくて何と叶えてあげたいと思ったが、おいそれとはいかない。今住んでいるマンションはペット可ではないから引っ越さねばならないし、東京への移転から物いり続きで今の芳彦にそんな余裕はなかった。

「飼ってもいいけど……ここじゃ無理だよ」

「駄目？」と、美菜子が悲しい目をする。

「駄目じゃないけど……何とかするよ」

美菜子の希求の顔を見ていると、どうしても否とは言えなかった。

「ホント？」

「ああ」

美菜子は途端に顔を綻ばせ、嬉しいと言って芳彦に抱きつき、キスをした。

二週間後、二人の新たな生活が始まった。会社への通勤が三十分も遅くなったペット可マンションには、トイプードルが新たな家族として加わった。ペットショップに買いに行った際、美菜子が一目見て決めた犬だった。大人しい茶色の犬で、寂しそうな目が自分に似ていると美菜子は言い、名前を〈トイ〉とつけた。安易な気もしたが、トイをかわいがる美菜子を見ていると、その名前は意外にしっかりしていて、芳彦は不思議な気持ちになった。ずっと前からトイが我が家にやってくると決まっていたかのようなようだった。トイとの生活が美菜子に平穏の日々をもたらしてくれるだろう、と芳彦は確信した。

マンションの近くには犬を散歩させるのに最適な大きな公園もあった。多くの木々が茂っていて芝生もあり、散歩道も綺麗に整備されている、よく手入れされた公園だった。芳彦たちと同じように、犬を連れた人が多くいる。大きい犬から小さな犬から様々な犬種がいて、まさに犬愛好者のための公園といってもいいほどだった。ここで毎日トイーを連れて散歩していれば美菜子のいい気晴らしになるだろうし、そのうち犬好き同士で知り合いになり、友達が出来るかもしれない。

休みの日はここで一緒に散歩しよう、と芳彦は提案した。それは芳彦のためでもあった。毎日の散歩には付き合えないが、休みの日くらいは日頃の心労を束の間忘れられるような、そんな場所が芳彦も欲しかった。何でも話すと約束したのに、美菜子に心配を掛けまいとして、弱い自分を見せたくなくて、会社での出来事を美菜子には話さないでいた。つい最近、東京へ呼び戻された本当の理由を知った。ただの人事異動だと思っていたがそうではなかった。営業部長は、過剰な接待で生じた損失の責任を押しつけるために芳彦を呼び戻したのだった。営業部の皆がグルだった。福岡にいて何も知らない芳彦に白羽の矢が立ち、喜んで戻った芳彦はいい面の皮だった。身に覚えのないことで嚴重注意を受け、不満だったが甘んじて受け入れるしかなかった。告発しようにも味方はおらず、美菜ことの結婚が控えていて、二人の将来を護らなければならなかった。部長の真意が分かり、邪魔者になった自分をいずれ会社から追い出すつもりかもしれないと思うと、芳彦は不安でならなかった。

会社内で芳彦は孤立を深めていった。自然と帰る時間は早くなり、美菜子とトイーに安らぎを求めた。主人の帰りを玄関まで走って迎えに来てくれるトイーが愛しかった。そんなトイーを美菜子は子供のように可愛がり、ひと頃よりもずいぶんと笑顔が見られるようになった。いい傾向だと芳彦は思った。自分さえ会社での処遇を我慢すれば、全ては上手くいく――。

次の休日になり、トイーを連れて美菜子と散歩に出る。公園の緑の木々が目に入るとそれだけで芳彦は癒される思いがした。リードに繋がれたトイーが先になり、後ろになりして二人についていく。ときどき立ち止まっては二人を見上げ、そしてまた走り出す。トイーが二人を水飲み場へと引っ張り、喉を潤し終わると、芳彦はベンチに座った。穏やかな午後を美菜子とのんびり過ごしたかった。トイーは二人の前で大人しくしている。

子供がフリスビーで犬と戯れている。自転車の横をとことこ走っている犬がいる。犬同士でじゃれ合っている。大型犬に吠えたてる子犬もいる。この瞬間、公園の中では、飼い主の幸福そうな顔がそこかしこで見られた。自分もそのひとりだ、と芳彦は思った。ここには幸福の時間がゆったりと流れていた。

「もっと早く犬を飼えばよかったね」と、隣に座る美菜子に話し掛ける。

「そうね。トイーは私の生活を変えてくれたわ。今は毎日が嬉しいの」

たった一匹の犬が美菜子の生活を変え、幸福を与えている。今までの憂慮は何だったのだろうと思うと、芳彦は自分の非力さを恥じ、胸中で苦笑いを零した。それでも、美菜子の笑顔が芳彦に何よりも幸福を与えてくれることに変わりはない。

二人の前を、ダックスフントを連れたカップルが通り過ぎる。芳彦たちと同じくらいの歳で、芳彦は軽くお辞儀をした。向こうも挨拶を返す。トイーは去りゆくダックスフントを見つめ、名残惜しそうに尻尾を振っている。

「ところで……知り合いは出来た？」

結果を急ぎすぎるのはよくない。それは分かっていた。しかし、今の美菜子を見ていると、いい結果が出ているのではないかと思えた。

美菜子は顔を伏せ、首を振った。

「やはり一週間やそこらじゃ難しいか……」

芳彦は努めて明るく言った。

毎日来ていても、同じ人と顔を合わせることはそうないだろう。それに今日は休日だから大勢の人がいるが、平日は閑散としているに違いない。

「そうじゃないの」と、美菜子は言った。

「どういうこと？ そうじゃないって」

「一週間経っても一ヶ月経っても知り合いは出来ないわ」

「何を言ってるんだ？ 機会は少ないかもしれないけど、毎日来ていれば、いずれは……」

「出来る訳がないの」と言い、美菜子はトイーを抱きかかえ、その目をじっと見つめた。トイーが美菜子の鼻をペロリと舐める。

「ちゃんと話してくれないかな」

美菜子がまた秘密を持った。それは深い闇の中に沈んでしまっている気がした。

トイーを見つめたまま、トイーに話し掛けるように美菜子は口を開いた。

「ずっとおうちで一緒だったのよねえ」

「それじゃ、散歩もしないで……」

美菜子はトイーから目を離さなかった。

「しませんでしたよねえ。だって、知らない人に話し掛けられるのって嫌だし、大きなワンちゃんは怖いものねえ」

新しいマンションに引っ越してからの、美菜子の日常を芳彦は初めて知った。

毎日トイーを連れて散歩していると思っていたのに、散歩先の公園で知り合いを作る努力をしていると思っていたのに、美菜子はほとんど外出せず、家の中でトイーと遊んでいた——裏切られた感があった。だが、腹は立たなかった。虚しくて寂寥感があった。

芳彦は事実を重く受け止めた。美菜子は限界まで追い込まれていたようだ。トイーだけが話し相手で、そのことの異常さに気づいていない。いや、気づいているのかもしれないが、認識するのを拒否している。

「明日からもおうちで遊びましょうねえ」と、美菜子がトイーに話し掛ける。トイーは嬉しそうに尻尾を振った。

限界まで追い詰められたのは美菜子だけではなかった。翌日会社へ行くと、芳彦に出張命令が出た。来週から半月ほど北海道へ営業の手伝いに行くことになった。部長の魂胆は見え見えだったが、芳彦は我慢するしかなかった。ただ、今のままで美菜子と離ればなれになるのは不安でならなかった。出来れば一緒に連れて行きたいが、半月の出張にそれは無理な話で、トイーの世話もあり、どうしても美菜子と離れて暮らさなければならなくなった。

家に帰ってそのことを美菜子に告げると、美菜子は少しも動揺しなかった。

「トイーがいるから平気よ」と言い、何を心配することがあるの？ という顔をして見せた。

芳彦は少なからず安心した。しかし、心の奥底にある懸念までは払拭できなかった。

離ればなれになった最初の夜、芳彦は北海道から電話した。美菜子に異常はなさそうだった。嬉々として、トイーと遊んだ話をした。それはまるで、小さな子供が親に向かって今日の出来事を一生懸命話すようだった。次の夜も芳彦は電話をした。特別な変化はなかった。美菜子は昨日と同じ話をした。

電話は一日おきになり、二日おきになった。東京の事情を知らない北海道支社の社員が芳彦を呑みに誘ってくれ、それが嬉しくてついつい毎日のように呑みに行くようになっていた。美菜子のことは常に頭にあったが、特別変わった様子はなかったし、何かあればすぐに電話するように言ってあったので、芳彦は美菜子の身に起こっていることなど知る由もなかった。

最終日の夜、芳彦が何度電話しても美菜子は電話に出なかった。さすがに、美菜子の身に何かが起こったと芳彦は直感した。何かは分からないが、それがよくないことだけは分かっている。

一睡も出来なかった芳彦は空港へ急ぎ、東京への便を朝一番の便に変更してもらった。空港での待ち時間、飛行機の中と、何も出来ない自分が苛立たしかった。

羽田に着き、家へと急ぐ。気ばかりが焦る。

住み始めてまだ二ヶ月にも満たないマンションの前に立つと、芳彦は急に怖くなった。最悪の事態が待っている気がした。冷たくなった美菜子の死体——。おぞましい考えを払拭し、芳彦は玄関のドアを開けた。おかしなところは何処にもなく、いつもの我が家の景色だった。ただ、走って出迎えに来てくれるトーイの姿がなかった。何かが違う空気を感じながらリビングに行くと、そこにトーイはいた。ケージの中でぐったりしている。芳彦に気づき、盛んに尻尾を振るが元気はなさそうだった。

キッチン、寝室、トイレと美菜子の姿を捜す。しかし、家の中の何処にも美菜子はいなかった。代わりに寝室で奇妙なものを見つけた。寝室の隅にもう一匹のトイプードルがうずくまっていた。こちらはトーイと違って白色だったが、同じように具合が悪そうだった。それでも尻尾を一生懸命に振っている。人懐こそうだが、首輪をしていなかった。捨て犬が何処からか迷い込んだようだ。そんなことよりも、今は美菜子を見つけ出すことの方が先決だ。

家にいないということは買い物にでも行ったのだろうか。芳彦は美菜子の携帯に電話してみた。しかし美菜子が出なかった。出ない理由はすぐに分かった。リビングの方で呼び出し音が鳴っていて、芳彦は美菜子の携帯をテレビの横の棚で見つけた。携帯を置いているくらいだから、おそらくコンビニかなんかの近場なのだろう。ひょっこり帰ってきそうな気もして、芳彦はもう少しの間、このまま待つことにした。湧き上がってくる不安感を抑え、落ち着こうとソファに腰を下ろす。

ケージが開いていたようで、いつの間にかトイが足元にいた。クーン、クーンと弱々しい声で何かを訴えている。それは餌を求めるときの、トイの甘え方だった。具合が悪そうに見えたのは病気のせいではなくて、腹が減っていただけのようにだ。冷蔵庫の牛乳を皿に移し、トイの前に置く。やはり腹が減っていたらしく、トイはピチャピチャと音を立て、勢いよく飲み始めた。その音を聞きつけて寝室にいたもう一匹のトイプードルもやってきた。こちらも腹が減っていただけで、二匹は仲良く並んで牛乳を飲んだ。何も食べていなかったのかと思い、芳彦はシンクの下に置いてあるドッグフードの袋を確かめた。空っぽだった。美菜子が餌を買い忘れたようだ。ドッグフードを買いに行っただろうか。それにしても、トイはあまりにも空腹そうで、二、三日何も食べていなかったかのようだった。やはり何か妙だ。

それにしてもこの迷い犬はどこからやってきたのだろうか。このマンションの別の家で飼われている犬が迷い込んできたのだろうか。だが、この白いトイプードルは首輪をしていなかった。北海道へ出張している間に美菜子が新たに買ったのだろうか。

牛乳を飲み終わると元気が出たようで、二匹のトイプードルはソファを駆け上がり、芳彦にじゃれ掛かった。二匹がじゃれ合いながら芳彦の膝をの上を奪い合う。芳彦は不思議な気がしていた。白い方のトイプードルは初めて見たというのに、ずっと自分の傍にいたような気がした。

二時間待っても三時間待っても、美菜子が帰ってくる気配はなかった。コンビニに行ったのでも、ドッグフードを買いに行ったのでもなさそうだ。家出をしたとは考えたくなかったが、芳彦はその可能性を否定できなかった。離ればなれになっているというのに頻繁に電話をしなかった。そのことを怒っているのかもしれない。怒って当然だ。トイーがいたとはいえ、東京に来て初めてひとりで過ごす美菜子をお座なりにしてしまった。優しくしてくれた社員に思わず甘えてしまい、美菜子の存在を顧みなかった――。

後悔の念に駆られ、芳彦は一筋の涙を零した。すると、迷い込んできた白いトイプードルが芳彦に顔を近づけ、慰めるように芳彦の涙を舐めた。

「お前は僕の気持ちが分かっているみたいだな……」

白いトイプードルを傍らに置き、芳彦は携帯を手に持った。由貴子の家かもしれない、とふと思った。可能性は低いが、会いたくない相手ではあっても、美菜子には他に頼れる人がいない。

由貴子に電話すると、由貴子は言下に否定し、銀座あたりで迷子になっているんじゃないの？と嫌みを言った。

日が傾くにつれ、芳彦の中にあつた“これは何かの間違いだ”の思いは薄れていった。どう考えても、家を出て行ったと思わざるを得なかった。二、三日前に出て行ったのだろう、大好きだったトイーを置き去りにして――。

しかし、家を出て行ったとして、何処へ行くのだろう。東京はおろか、関東圏に知り合いはいない。ひょっとして――実家に帰ったのだろうか。東京での生活に嫌気が差して実家に帰った――おそらくそうだろう。

芳彦は美菜子の実家に電話した。

「もしもし、井川です」

「久しぶりだね、何かあったのか？」

芳彦が自ら美菜子の実家に電話するのは初めてだった。それだけで美菜子の父、敬三は異変を察していた。

「美菜子がそちらに行っていないでしょうか？」

喧嘩でもしたのかね？ 美菜子は帰ってきているよ——そんな言葉が聞けるのを芳彦は祈った

。

「美菜子が？ いや、帰ってきてないが……」

実家にもいない。

芳彦は愕然とした。最後の頼みが崩落した。

「美菜子はそっちにいるんじゃないのか？」と義父の敬三が、驚きと不審の声で訊く。

「北海道の出張から今朝帰ってきたんですが、帰ってきてみると美菜子の姿がないんです。買い物にでも出掛けているのかと思ったんですが、いつまで経っても帰ってこなくて……もしかしたら、と思ひまして」

「どういうことなんだ？ 美菜子はいなくなったのか？」

敬三の声に怒りが含まれる。

「申し訳ありません」

「謝ってくれてもどうにもならんだろう。美菜子が行きそうなところは当たってみたのか？」

「ええ」

由貴子のところだけだが、それが美菜子の行きそうな場所の全てだった。

「警察へは？」

「それはまだ……」

「今日帰ってこなかったら搜索願を出すんだぞ」

「分かりました」

芳彦は慚愧に堪えなかった。敬三は多くを語らなかったが、内心、はらわたが煮えくりかえり、将来の婿に失望していることだろう。大事な娘を遠く離れた東京へ連れて行かれ、さんざん苦勞をかけさせられ、ついには行方不明にまでされてしまったのだから――。

携帯をテーブルに置くと、電話の間は大人しくしていた二匹のトイプードルがまとわりつきだした。今朝、牛乳を与えただけだったので腹が減っているようだ。ドッグフードが切れていたことを思い出し、芳彦は駅前のペットショップで買ってきた。皿に盛る。二匹が仲良く食べ始める。

。犬たちが食事をしている間に、一階の管理人室へ行く。テレビを見ていた管理人が小窓から顔を出した。

「井川さん、何かご用ですか？」

「うちに犬が迷い込みまして……帰ってみたらトイプードルがもう一匹いたんですよ。どなたか探していらっしゃるんじゃないかと思ひまして」

「迷い犬？ いえ、そんな話は聞いてませんね。多分、このマンションの犬じゃないでしょう」

「ご近所でしょうか？」

「そうですね。偶然エレベーターに乗り合わせたりして迷い込んだんでしょう。奥さんが何かご存じなんじゃないですか？」

美菜子の行方不明を管理人に報せたくはなかったが、今後のこともあると思い、芳彦は正直に話すことにした。

「実は……いないんです」

「何処かへお出かけですか？」

「さあ、何処へ行ったのやら、お恥ずかしい限りで……。犬が迷い込んできた代わりに妻がいなくなりました」

自嘲して言ったために、事態の深刻さは伝わらなかったようだ。

「早く帰ってこられるといいですね」と、管理人に微苦笑されてしまった。

犬を探している人がいたら教えてくださいと言い残し、芳彦は管理人室を辞して公園に向かった。そこにいないのは分かっていた。しかし何処を捜せばいいのか、他に思いつかなかった。

夜の公園は静かだった。

街灯の周りを虫が飛んでいる。

ジョギングをしている人が走り抜けていく。

犬を連れた人もいた。

ひょっとして公園で知り合いが出来て、その人のところに遊びに行っているのでは——と一瞬思ったが、その考えをすぐに棄てた。肝心のトイを放っておいて、美菜子がそんな人のところへ行くはずがない。

これからどうすればいいのだろう。

芳彦は暗い公園をあとにしてマンションに戻った。二匹の犬が出迎える。ドッグフードで腹を満たし、犬たちはすっかり元気になっていた。鬱陶しいくらいに部屋の中を走り回っている。

冷蔵庫から冷えた缶ビールを取り出し、一気に飲み干す。空腹を感じたが、食事をする気にはならなかった。続けざまにビールを流し込む。二つ三つと空いた缶がテーブルに並ぶ。

ほろ酔いでベッドに横たわる。

明日からまた会社に出なくてはならない。だが、とても行く気にはなれなかった。それどころではない。どうにかして美菜子を捜し出さなければならない。会社を休めば部長の思う壺になるだろう。それでも構わなかった。美菜子がいなければ働くことなど何の意味もない。

もう何もかもがどうでもよくなった——。

と、ベッドに勢いよく乗っかかってきたものがあった。驚いて足元を見やると、トイではないもう一匹の、白い迷い犬が芳彦に寄り添ってきた。顔を近づける。また顔を舐めるのかと思ったら違った。白いトイプードルは芳彦に優しくキスをした。

一階の管理人室を、鞆を提げた初老の男が沈痛な顔で覗き込んだ。管理人が小窓を開ける。目の前の男に見覚えがなく、怪訝そうに尋ねた。

「どちら様でしょうか？」

「私はこのマンションに住む上原美菜子の父親です」

「上原美菜子さん？」

「井川芳彦さんと一緒に暮らしているんですが……」

「ああ、井川さんの……」

「そうです。美菜子の行方が分からなくなったとかで、心配できたんですが……」

「行方不明なんですか？」と、管理人が驚きの顔をする。

「ご存じではなかったようですね」

「いえ、いなくなったとは聞きましたが、そのあと井川さんから連絡がありませんでしたので、てっきり戻ってこられたんだと……」

「私のところにも連絡がないんですよ。それどころか、こっちから何度も電話したんですが、全然出なくて……」

「そういえば、昨日今日と井川さんの姿を見ていませんね」

「それで……美菜子たちの部屋を開けていただけないでしょうか？ 何かあったと思うんです」

「わかりました。すぐに」

管理人がマスターキーを持って芳彦たちの部屋へ急ぐ。敬三が険しい顔で後が続く。管理人が扉を開けると、奥から犬の鳴き声がした。複数いるようだ。犬たちが一斉に玄関に走ってきて、中の白い一匹が敬三目がけて飛びかかった。敬三は驚いて後退ったが、犬に危害を加える意図はなかったようで、嬉しそうに尻尾を振り、足元でじゃれている。初めは警戒していた他の二匹もつられるようにしてじゃれ始めた。

「三匹いる……」と、管理人が不思議そうに言う。

「……と、仰いますと？」

「井川さんたちが飼っていた犬は一匹だったんです。確か茶色のトイプードルでした。そのあと何処からかもう一匹迷い込んだって聞きましたが、白いのが二匹いますね。さらにもう一匹迷い込んだんでしょうか」

「犬なんかより……」

敬三は靴を脱ぎ捨て、部屋の中を歩き回った。構って欲しそうに犬たちが後ろをついてくるが、無視し、部屋の至る所に美菜子の失踪の手がかりを求めた。

しかし、そんなものは何処にもなかった。それどころか、美菜子に続いて芳彦までもが行方をくらませた。何かが起こったのは確実だった。

「とにかく警察へ行ってきます」と言い残し、敬三は部屋をあとにした。

警察署へ行って家出人の搜索願を出す。

警官が失踪の原因について思い当たること、夫婦仲のこと、失踪時の服装など、いろいろ細かいことを訊いた。そのほとんどに敬三は答えることが出来なかった。服装など知るはずがないし、夫婦仲にしても家出をするほど不仲だったとは思えなかった。それに、それが原因だったとしても、美菜子が何の連絡もしないのが謎だったし、芳彦まで姿をくらませるのも妙だ。何から何まで、敬三には分からないことだらけだった。

重い足取りで警察から美菜子たちの部屋に戻ると、管理人は呑気そうに犬たちと遊んでいた。敬三の帰りを知り、首輪をつけていない二匹の犬が敬三の元に走り寄ってきた。まだ出会って数時間しか経っていないのに、この白い二匹の迷い犬は敬三にすっかり懐いていた。

「どうでした？」と、管理人が訊く。

「いかに大人の家出人の搜索が難しいかを聞かされました。覚悟の家出でしょうから」

「そうは言っても警察が何とかしてくれますよ。ところでこの犬なんですけど……」と言って、管理人は茶色のトイプードルを抱きかかえた。

「井川さんのところで飼われていた犬ですが、どうでしょう、井川さんたちが見つかるまで私の方で預かろうと思うんですが」

「そうしていただくと助かります」

「他の二匹ですが……首輪をしていませんから野良犬かもしれませんね」

「野良犬ですか？　こんなに可愛いのに」

「元は飼われていたのかもしれませんが、飼いきれなくなって棄てられたんでしょう、よくある話です」

「無責任な飼い主がいるものですね」

「それで……この二匹の面倒までは見きれませんので、保健所に引き取ってもらおうと思うんですが……」

「保健所……殺処分ということですか？」

「そうなるでしょうね」と、管理人が心苦しそうに言う。

話の内容が分かったのか、一匹の犬は怯えるように敬三に身を寄せ、もう一匹は、そうはさせるかとばかりに、管理人の前に立ちはだかった。

「そりゃ可哀想だ」

「子犬だったらペットショップで引き取ってくれるかもしれませんが、二匹とも成犬ですからね、難しいでしょう。私だって保健所なんかには渡したくはないんです」

他に何かいい方法がありますか、と管理人が敬三を見る。

「私が飼いますよ」

途端に、二匹のトイプードルは敬三の周りを嬉しそうに駆け回り、一匹がジャンプしてその胸に飛びかかった。敬三が受け止めると、敬三の顔をペロペロと舐めた。

「井川さんの奥さんは福岡の出身だったと記憶していますが、福岡まで連れて帰られるんですか？」

「仕方ないでしょう。殺処分になんか出来ませんよ、こんなに懐いてくれているんですから」

二匹の白いトイプードルは福岡の、美菜子の実家で飼われることになった。

福岡に戻った敬三は、来る日も来る日も警察からの情報を待った。敬三の方からも頻繁に警察に出向いたが、めぼしい情報は何もなかった。あれぎり美菜子と芳彦の消息は杳として知れない。

今、福岡の片田舎の、寂れた商店街の片隅にある、小さな家の小さな庭を、二匹のトイプードルは毎日元気に駆け回っている。

了